

司書課程履修のみなさんへ

別府大学付属図書館長 井上 富江

みなさんご卒業おめでとうございます。別府大学の司書課程で学ばれたことは、これからの生涯のあらゆる場面で役にたつものと信じています。司書の仕事は非常に奥が深いのがわかるのも卒業してからだと思います。

別府大学の図書館には実はとても貴重な図書があり、日頃は残念なことに図書館の奥深く眠ったままになっています。今回「稀覯、所蔵書展」を企画したのも、一つには皆さんにこれらの本の価値を知っていただき、それらを活用するに十分な基礎力をつけていただきたいと願ったからなのです。今回の展示では「アーサー王の死」（トマスマロリー原作ピアズリー挿絵 第一巻1893年初版ナンバー入、第二巻、第三巻1894年版、ピアズリーの銅版画多数）、「アルドゥス版プラトン全集」（1513年初版）、「Cahiers d'Art カイエ・ダール」（1926-1960年）（パリで発行された美術雑誌でエルンスト、ミロ等のオリジナルの版画入）、「ドーソンの蒙古史」（1835年版4巻）、皇帝の蔵書としても名高い「四庫全書」（1,500冊）を展示しました。どれをとってもいずれ劣らぬ書籍の数々です。

まずこれらの本の保存をどのようにすれば一番有効なのか、それをいつでも、誰でも、好きな時に書籍を痛めることなく利用するためにはどの方法が一番有効かつ能率的なのか。司書として、やるべきことは数限りなくあります。西洋の19世紀出版の書籍は酸性紙の場合も多いのです。脱酸化処理をほどこす場合の方法、保存方法、展示方法、どれ一つとっても皆さんの日常業務とはおよそかけ離れたところにあります。日本の古い出版物は和紙でできていますので、その綴じ方や保存方法はまた違ったものです。図書館の奥深くこもって、和綴じの本を読み耽った経験をお持ちのかたなら、虫喰いの書籍の修復方法にも思い至るかと思います。西洋の写本の場合は、「バラの名前」でも有名になってしまいましたが、写本をめぐる殺人が起きることすら稀ではないのです。値段などつけようもないほど重要なものも数多くあります。私の場合もフランスの国立図書館の写本室の一角で、ずっしりと重い感触に圧倒されながら、少しずつ読み進んだ記憶があります。今ではそれらの写本の一部はインターネットにのって世界中の人々に読まれるようになっています。興味のある方はフランスの国立図書館のGARICAのページにアクセスしてみてください。これらの写本がどのような歴史を経て、現在の展示場所に至ったのかをたどるのも又楽しい司書の仕事なのです。これからの人生に、司書としての勉強が大いに生かされますように願ってやみません。

(いのうえ・とみえ)